

消えゆくローカル線

玉眞 俊弥

2014年春、鉄研旅行で夕張駅に降り立った。もともと新夕張駅で乗り換えだったが、時間があるため夕張支線（新夕張～夕張）に乗って時間を潰すついでとして夕張駅に来たのだ。下調べをせずに行ったので、小さな佇まいの駅に少々驚いてしまった。終点の駅からホームは1つだとしても、北海道によく見られる昔線路があったと思われる広大な空き地があるかと思っていたら、1面1線でただ着いて発車するだけという感じだった。せっかく来たのでホームから出て外に出てみた。駅前にはホテルがあるのみで、こんなにも殺風景なところがあるのかと正直思ってしまった。駅に隣接する観光案内所と思われるところにはおばちゃんがいる、夕張駅から発車する時に、黄色い旗（当時は旗に見えたが、今思えば夕張は『幸福の黄色いハンカチ』の舞台であったからおそらくハンカチだったかもしれない）を振って見送りをしてくれた。発車した後、このおばちゃんを誹謗する心ない部員がいたことも記憶している。

一体なぜこんなことを書いたのか。先日夕張支線が廃線になる方針との報道があったからだ。2019年春での廃線が予定されている。

ここ最近、特にJR北海道を中心としたローカル線の廃線が相次いで報道されている。廃線になる理由は多くが乗客の減少で、夕張支線もそれが理由である。なぜ乗客が減少してしまうのか。それはもちろん沿線住民の減少もあるが、モータリゼーションの普及や鉄道と並行して走るバス路線に乗客が流れてしまうことも大きい。バスの方が遅延は出やすいが本数は多く出せるし、こまめに停留所を設けることができるなど、鉄道に勝てる点が多いのが現実なのである。

廃線となるのが鉄道会社から各自治体に伝えられると、多くは反対運動が起き、“〇〇線を残そう”という運動が始まる。だが、一言に〇〇線を残そうと言ってもそんなに簡単なことではない。いつも自家用車やバスで移動しているものをわざわざ本数が少なくて目的地に直接行けない鉄道を利用しなければならないのだ。では観光客を呼び込むのはどうだろうかということにもなる。しかし、観光スポットがなければ観光客は来ないし、今まで観光客誘致をしてこなかった自治体にも責任がいくことになる。結局は廃線となりバスに転換などになってしまうのである。

ローカル線には歴史的な駅舎や施設などの鉄道遺産があるものや、美しい景色を見られることができるものもあるし、なんとと言っても、鉄道で行くことの出来る土地がどんどん減っていつてしまい、一乗り鉄として、完乗が難しい路線が消えてしまうのは大変悲しいことである。無理に利用してほしいとは言わないが、もし旅行などで地方に行かれた時は是非ともJRに限らず地方の鉄道・路線に乗ってみてはいかがだろうか。

編集後記

こんにちは。本日は高学祭および旅行・鉄道研究部の出展にお越しいただき、またこの停車場を手にとっていただきありがとうございます。

今年の停車場、いかがだったでしょうか。

表紙の通り、この停車場もおかげ様で第 20 号を発行することができました。これもひとえに読んでいただいている皆様のおかげです。部を代表して御礼申し上げます。

第 20 号なのですが、今年は創刊 19 周年です。抜けている刊があるらしいのでよかったら探してみてください。私は見つけたことはないですが(笑)

停車場に関わりはじめたのは中学 2 年の時でした。当時は一人の執筆者としてでしたが、徐々に編集にも関わり、停車場完成までの苦労を味わってきました。今年は私が全体監修を務めることになり、表紙・目次を作る仕事が増えて大変な思いをいたしましたし、わからないことも多々あり、いろいろな人に迷惑もかけましたが、こうして停車場第 20 号を無事完成させることができたのも、部長を初めとする編纂委員の皆、執筆してくれた部員、松崎先生、西島先生、そして製本をしていただいた有限会社 PSP 様の協力あってです。この場を借りて感謝申し上げます。

さて、旅行・鉄道研究部に入ってもう 4 年が経ちました。楽しい同級生や先輩、後輩達とともに活動をしていると、4 年なんて一瞬でした。時には喧嘩やトラブル、揉め事も起きたりして(起こしもしましたが)、早く引退したい、退部したいと思うことも多々ありました。でも、結局は鉄研が一番落ち着くんですね。なんか言いながらも鉄研が自分にとっての居場所なんだなって。そう思いながらこうして続けてきました。鉄研には個性あふれる変わった部員が山のようにいますが、それが鉄研なんです。そういう人たちと活動していると常に想定外のことが起こるので自分が磨かれていきます。高輪に入学したら鉄研に入ることをおすすめしますよ。

最後になりますが、停車場はこの旅行・鉄道研究部を語る上でかかせないものです。そういった物の編集に携われることができるとも誇りに思います。年々新しくなる停車場を来年以降もどうぞお楽しみにしてください。

この辺で筆を置いて、コラム兼編集後記を終わらせていただきます。

部員の思いが詰まったこの停車場を最後までご覧いただきありがとうございます。

これからのこの鉄研を温かく見守っていただき、応援していただけると幸いです。

2016 年 8 月 31 日

2016 年度停車場編集委員長 高 2 玉眞 俊弥